

営農情報

第100号 平成24年9月19日発行

(大豆営農情報 9月号)

福岡大城農業協同組合
南筑後普及指導センター

1 病害虫の発生状況について

<ハスモンヨトウ>

適期に防除されたこともあり、少ない状況です。フェロモントラップ調査によると、今後9月末～10月初旬に再度幼虫がふ化することが予想されますが、気温が下がっているため、ふ化率は下がるものと思われます。2回目の防除は、ほ場の状況を見て判断して下さい。

<カメムシ類>

発生は平年並です。カメムシによる被害を受けると、大豆の青立ち株の増加や、等級の低下につながります。防除を実施していない場合は、早急に実施しましょう。

<その他>

一部のほ場で、葉焼病の発生が見られます。おもに葉に発生する細菌病で、症状は、大豆の葉全体が淡黄色になり、葉の表面には、黒褐色の斑点とそのまわりに黄白色のかさが見られ、ひどくなると落葉します。気温が高い時に病気の進展が進むので、防除の必要はありません。

2 防除薬剤

薬剤名 (希釈倍率)	対象病害虫	使用回数	1000あたり農薬使用量
プレバソフロアブル5 (4000倍)	ハスモンヨトウ	3回以内	25ml
キラップフロアブル (2000倍)	カメムシ類	2回以内	50ml
トップジンM水和剤 (1000～1500倍)	紫斑病	4回以内	70～100ml

※散布量は10a当たり100～300リットルです。

3 今後の管理

(1) ほ場内の雑草は、汚損粒やカメムシ被害の原因になります。早めに必ず取り除きましょう。

また、花や実のついた雑草を、抜いた後そのままにしておくと、その後も登熟が進み、種子が生存します。抜いた雑草はほ場の外に持ち出し焼却するなどして、翌年以降の発生を減らしましょう。

(2) 大豆青立ち株も汚損粒の原因になるので、収穫前に取り除きましょう。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!